

イケオジ執事に「お嬢様はマゾヒストの気がありますね」

と甘やかされながら快楽を教え込まれちゃうお話

く忠誠心マシマシの前戯で毎回おまんこぐちゃとろ♡ですく

私にとって、桂木は手足のようなものでした。

奴隸のように扱っていたわけではありません。彼が、自らそのように動いていたのです。

少し喉が乾いたと思えば紅茶ができてきて、甘いものを思えばそこにクッキーが添えられます。思わず「すごいわ」と小さく漏らすと、桂木は目を緩やかにカーブさせて笑いました。

「私が何年貴女様にお仕えてきたとお思いですか」

からかうように言われるので、いつも負けた気持ちになってしまいます。彼は私のことを子ども扱いばかりしてくるのです。

ただ一方で、彼の表情はどこか誇らしさで歪んでいるようでもあります。その時ばかりは、彼のことをいじらしいと感じてしまいます。

ボールを拾ってきた犬の真似をさせたら、桂木の右に出る者はいな

いでしよう。

「ご婚約、おめでとうございます」

だから某財閥のご子息との婚約が決まった折、一番に思ったのは桂木のことでした。

「ありがとうございます」

「寂しくなります」

「……全然思っていない顔だわ」

「まあ、執事としてはとうに覚悟していたことですから」

覚悟していたのは私も同じことです。けれど、大人の余裕とでも言うような態度にやはり負けたような気持ちになりました。

桂木は続けます。

「お嬢様ほど愛らしく、理知的な女性はそうおりません。どこにいても、何をしていても貴女様は『大丈夫』です。気も強くいらつしやい

ますしね」

私の不安の粒度すら理解していそうな言葉でした。甘えきっている私は、桂木の慇懃無礼な言葉に返します。

「それって褒めてるのかしら」

「褒め言葉以外であるのですか。まあ……強いて言うのであれば、足りていないものはございます。一つだけです」

「？ 何？」

一つだけ、という限定的な表現がとても気になりました。

桂木は言います。続いた言葉は、箱入り娘として育った私には些か刺激の強いものでした。

「性経験。つまるところ、セックスの経験ですね」

「……！」

衝撃と同時に「来た」とも思いました。

執事に性教育を受けることは、竹内家のしきたりでした。結婚後、性に翻弄されて余計なスキャンダルを避けられるように厳しく躾けられるのです。

もちろん未来の旦那様も了承していることです。「性的スキャンダルを起こし得ない」「けれど、夫婦の性生活には何ら支障はない」というお墨付きが、竹内家特有のブランドとも言えるのです。

「早速、今夜から『お勉強』をいたしましょう。桂木が手ほどきいたします」

私は内心、心臓を高鳴らせていました。

「桂木は優秀だ」とおばあさまもお母様もお姉さまも、みな口を揃えていいます。



桂木の『お勉強』は、湯浴みの時間から始まっていました。

その日、私はメイドたち五人に身体中を隅々まで洗われ、ムダ毛の処理をされ、丁寧に髪の毛を乾かされて、ほんのりとメイクを施されました。

仕上げにと香水を吹きかけながら、メイド長である森崎は言います。

「不安に思うことは何一つありませんよ。桂木様に全てを委ねることだけが、今夜のお嬢様の使命です」

委ねるということ自体には抵抗がありませんでした。何故なら桂木は、私の手足のようなものなのですから。



いつもより薄い生地で作られたネグリジェは、いつもよりもレースがふんだんにあしらわれていました。まるで献上されたプレゼントのような気持ちです。

「失礼いたします」

どういう気持ちでいたらいいか分からず本を開いたり閉じたりしていると、桂木が私の部屋をノックしました。招き入れた桂木は、ハーブティーを用意してくれています。

「珍しく緊張をされていますね。ホットミルクを用意した方がよろし

かったでしょうか？」

「……ハーブティーでいいわ」

いつものように揶揄われ、少しムツとしてしまいました。その表情に桂木が笑います。

「失礼いたしました。どうぞ、お飲みになってください」

サイドテーブルにハーブティーがセットされ、私はベッドに腰かけました。

そばに立つ桂木に見つめられるのはいつものことなのに、何だかとても緊張します。

「……」

（ハーブティーの味もよく分からないわ……）

普段飲んでいるものより少し甘いような味もしたし、苦いような味もしました。いつもならず身体に沁みていくハーブの香りが、一瞬

にして霧散していくようです。

「お味はいかがですか？」

「……ええ、美味しいわ。これは何のハーブを使っているの？」

「いつもと全く同じものですよ」

「え？」

「そんなはずはない」と思いました。けれど、「言われてみればそうかもしれない」なんてあやふやな気持ちも湧いて出ます。思わず驚いた顔を見せると桂木は笑いました。

「ただ、少し薬を混ぜております」

「薬……？」

「世間一般には、媚薬と呼ばれるものですね」

「！」

胃の中心が、カッと熱くなりました。媚薬だと知った途端に効き始

めるわけがないのに、思い込みとは不思議なことだと思っています。

「性行為が気持ち良いものであると知るための『お勉強』ですので、初日だけ使用します」

「っ……」

「ちなみに、今後は少しでも普段と違う味がしたら吐き出すように。貴女様の身を守る術でもありますよ」

軽く叱られている間にも、私の胃は今度こそ熱を持っていました。連動するように鼓動が速くなり、瞳が潤んでいきます。抗いような作用は、思い込みではなく明確に薬によるものでした。

「効いてきたようですね。即効性がある代わりに、長く残らない媚薬です。怖がらずに受け入れてください」

森崎の声が蘇ります。

（私の使命は『桂木に全てを委ねること』）

ティーカップを手放そうとすると、すかさず桂木が受け取り、音もなくテーブルの上に置きました。私の背中を撫でた桂木は、「どうぞ、横になつてください」と優しい声で言つてきます。

（背中が……くすぐつたい……っ）

桂木の手に触れることは、そう少なくありません。だというのに、触れられた箇所が皮膚がざわざわと波打っているようでした。

言われるがままにベッドに寝転ぶと、桂木がゆつくりと私に覆い被さってきます。

ぎしりとベッドが軋みます。私以外の人間で軋むベッドは、重いと文句を言っているようでした。

「失礼いたします」

部屋に入ってくるときとまるで同じ抑揚で言う桂木は、何の違和感も感じさせないまま私に口付けをしました。

初めてのキスは執事とすることになる、と幼少のみぎりから承知していた私にとって、そこに嫌悪感は一切ありませんでした。むしろ、薬の効能も相まって達成感すらあったように思います。やっと大人の女性になれる。そんな気持ちでした。

「息を止めてはダメですよ、お嬢様」

指導であるかのように言われ唇の力を少し抜くと、桂木の舌が入ってきました。驚きで「ん……っ♡」と声が上がると、その声が自分の声とは思えないほど高く、羞恥心が浮き上がります。

「舌も引っ込めない」

今度は紛れもなく指導でした。自分の声や状況を噛み砕く隙もありません。桂木の生暖かい舌に向かって控えめに舌を差し出します。すぐに、にゆるり♡と舌を舌で撫でられ、感じたことのない感触に鳥肌が立ってしまいます。

「はあ……っ♡」

口を少し開けているせいで、そこから艶かしい声が溢れてしまいました。くちゅ♡くちゅ♡と唾液の音が響いたことも重なって、羞恥心で目を細めます。

一方で桂木は、優しい優しい声で言いました。

「可愛い声です、お嬢様」

「っ……♡」

褒められたというのに、嬉しさより恥ずかしさが勝って顔が熱くなるのを感じました。いつも子ども扱いばかりされているせいでしょうか。

「お召し物も大変似合っております。扇情的です」

ネグリジェ越しに身体を撫でられると、ピクッ♡と大袈裟なほど震えてしまいました。薬の効果なのか、お腹の奥がじいんとして、まる

で自分の身体ではないようです。

静かな混乱に浸されていると、桂木の舌がちゅるっ♡と再び私の口内に入ってきました。

「ん、……ふあっ……♡」

官能的な湿度や動きにも徐々に慣れて、桂木の舌を気持ちいいと感じるようになりました。でもどこからか滲む怖さがあり、桂木の服をぎゅっと握ります。

すると桂木は「素晴らしいです」と小さく言いました。

「男を煽る術を、無意識ながら理解されていますね。可愛いですよ」

無意識にしたことを褒められ、嬉しくなってしまったのは否めません。後押しされるようにくち♡くち♡舌を絡めると、桂木は大きな手を私の胸に添えました。

男性の手で触れられるのは、当たり前ですが初めてです。心臓がバ

クバクと鳴っていました。

「服を脱がされている時も、舌は休めないように」

そう言いながら、桂木がネグリジェのボタンを一つ一つ丁寧に外していきます。指示通りに舌を絡ませながら、徐々にはだけていくネグリジェのレースを肌を感じていました。

今夜、私の着替えには下着が用意されていませんでした。ネグリジェを脱がされると、一糸纏わぬ姿になってしまいます。

「お美しい」

私の裸体を見下ろした桂木は、独り言のように声を落としました。

乾燥した指で私のくびれを撫で、私の唇にキスをします。

指が動いたたびに私の身体がびくんつと揺れ、油断したかのように唇から「あっ……♡」と甲高い声が漏れ出ます。子ども扱いばかりされていたので、大人の女性として扱われている感覚がとてもくすぐった

かったのです。

「感度も申し分ないですね」

「っ……」

「嬌声は我慢しないように。そちらの方が盛り上がりますので」

言いながら、桂木は私の身体を撫で続けます。少し乾燥した指先はじつとりと熱く、手のひらは私より一回りも二回りも広く厚いです。撫でられてるだけなのに、それがよく分かりました。

「セックスはただ性器を擦り合わせることはありません。ムードを含め、お二人で作り上げるものです。共同作業といっても過言ではないですよ」

むにゅっ♡と桂木が乳房を揉みます。顔を繕うことができず、恥ずかしさをそのまま表情に出してしまいます。

「あ……ッ♡」

「ムードという点におきましては、お嬢様の恥じらいは大変よろしいかと思えます。男心がくすぐられますね」

もにゅ♡ もにゅ♡

桂木の大きな手が、私の乳房を堪能するように揉み続けます。心臓の音が伝わってやしないかと密かに緊張しました。

「乳房を好む男性は多いと思ってください。こうして揉みしだくことも前戯の一つです」

「んっ……」

「女性にとっては『揉まれている』だけかもしれませんが、このようにされるといかがでしょうか？」

すりっ♡

桂木は中指だけを浮かせると、その腹で私の乳首を優しくさすりました。布が擦れるような優しさだったのにも関わらず、喉から一際高

い声が飛び出ます。

「あっ♡」

「良い声が出ましたね」

「っ……♡」

「声は我慢しない。先ほど教えましたよね？」

自分の声が恥ずかしくて口をキュツと結んでしまった一瞬を、桂木はピシヤリと叱りました。叱りながら、中指が両方の乳首の側面をすりすり♡すりすり♡と擦ってきます。声を我慢してはならない私は、唇の力を抜いて嬌声を溢しました。

「あ……ッ♡ んんっ♡」

「擦られるだけで気持ちがいいでしょう？」

「ん♡ き、気持ちいい……ッあ、んうっ……♡」

「ああほら、柔らかかった乳首がコリコリ♡と硬くなってまいりまし

たね。分かりますか？ お嬢様」

桂木に擦られた乳首は、指摘通り徐々に硬さを持つていきました。つん♡と勃ってしまった乳首を、桂木の親指と人差し指が摘みます。そうしてその指たちは、いやらしい硬さを知らしめるようにこりゅこりゅ♡こりゅこりゅ♡と乳首を弄りました。

「ッあん♡ だめ、それっ……♡ つまんじゃ……っあ♡」

「こういった性感帯は、身体のいたるところにあります。一つずつ丁寧慣らしていきますよ」

くり♡ くり♡ くり♡ くり♡

乳首にかける圧を少し強くした桂木は、丁寧に丁寧に私の乳首を摘んで解しました。かと言ってもちろん、コリコリと硬くなった乳首が柔らかくなるはずがありません。強くなった圧に悦ぶように、さらに硬さを持つていきます。

「あッ……♡ 桂木……っ、んッ♡ そんな、にっ♡ いっぱい、クリクリって……♡ や……っ♡」

「乳首を慣らしているだけなのに腰をピクピク跳ねさせて……可愛らしいですよ、お嬢様」

私の乳首を執拗にこねながら、桂木はそう笑います。

腰が揺れてしまっていることに、私はその時初めて気づきました。下半身は全く触れられていないのに、女性器を起点としてピクッ♡ピクッ♡と跳ねているのです。

「な、なんでっ……♡ 勝手に……ッん、あ♡ んうッ♡」

「感じているということです。腰をカクカクさせている様は、男から見ると非常にそそられます。普段のお嬢様の振る舞いからは想像できないほど下品な動きをされていますよ」

「やっ♡ あッ、だめっ……♡ し、したくないのに……ッあ、ひんっ

♡ み、ないでえ……っ♡」

「往々にして夫だけに見せる下品な姿というのは、独占欲を掻き立てるものです。恥ずかしがらずに揺らしてください」

「あっ、あっ♡ ひっ♡ んっ♡」

こりこり♡ こりこり♡ こりこり♡ こりこり♡

私の乳首をきっちり挟む桂木の指は、しつこくしつこく強弱をつけてきます。その度に私の腰はぴくっ♡ぴくっ♡と否応なしに跳ねてしまっていました。

「お嬢様は大変感度がよろしいです。地位の高い男性ほど、独占欲と加虐心が強い傾向にありますから、きつと旦那様にも可愛がっていただけますよ」

「か、感度……って、っあ♡」

「乳首を少し可愛がるだけでこんなにも腰を揺らしてるんです。男性

の多くは、こうやってしつこく虐めたくなつてしましますよ」

虐めるという不穏な文言であるはずなのに、心臓の裏側が甘く痛みました。その痛みを不思議に思う間もなく、桂木が私の胸に顔を近づけます。そうして、長い舌でぺろっ♡と勃起した乳首を舐め上げるのでした。

「ひあんっ♡♡」

「素晴らしい反応です。指とは違った趣きがあるでしょう？」

趣きがどうであるかは私には判別しがたくありましたが、与えられた快感だけは確かでした。

指よりも柔軟なそれが下から上へと乳首をちろ♡ちろ♡と優しく撫でるだけで、じわ♡と股間が濡れていくのを感じました。膝がクネクネと動き、自分でも止めることができません。

「桂木っ……♡ あっ♡ んん……ッ♡」

「いやらしい声が出てとても優秀ですよ、お嬢様。どのように気持ちいいか、きちんと言葉になさってください。これも『お勉強』です」

片方は指でクリクリ♡と弄られ、もう片方は舌でれろっ♡れろっ♡と遊ばれます。それぞれ違った快感に身悶えながら、私は拙くも言葉を探しました。

「あっ……んッ♡　ち、乳首を遊ばれるのっ♡　き、もちイイ、です……っ♡　勝手に腰が跳ねて、ッ、ん♡　恥ずかしいの……♡　声、出ちゃう……んっ♡」

「ええ、そうですね。では、優しくされるのはどうですか？」

すり……♡　すり……♡

桂木の太い中指が、急に動きを変えます。私の乳首の周りを、優しい素振りで撫で始めたのです。

舌も、ちろちろ♡と動いていたものがれろお……っ♡れろお……っ♡と汚れを舐めとるような動きになってしまします。

なんだか、とても寂しい気持ちでした。いえ、「物足りない」と言った方が近いのでしょうか。

（気持ちいいけど……っ♡ もっと、強くしてほしいっ……♡）

「ん……っ♡ かつら、ぎっ……♡ もっとっ……んッ……♡ ピンッ♡で、弾いてえ……っ♡」

「素晴らしいおねだりです。お望み通り、お嬢様の腫れ上がった乳首をピンピン虐めて差し上げましょうね」

桂木は、デコピンをするような指の形を作ると、順当に私の乳首に向かってデコピンを繰り返しました。なんと不敬なことでしょうか。

だというのに、ピンッ♡と中指の爪で乳首を弾かれると私の口からは快感で「あんッ♡」と惚けたような声が出るのです。

（執事にこんなことされて、エッチな声出しちゃうなんて……っ♡
デコピンどころか折檻さえされたことないのにつ……っ♡ でも、乳首
弾かれるのイイ……っ♡ 好きっ……っ♡♡）

「あうっ♡ ん……っ、いいっ……っ♡ あッ♡ ピンピン♡ってされ
るの、気持ちいい……っ♡ あんっ♡」

「お嬢様、おまんこはどのようになっていますか？」

「ッ……っ♡」

『おまんこ』が女性器を指すことも、それが下卑た表現であることも
知ってはいました。でも、教育係の桂木が言うのだから、そういった
言葉を使うことが好ましいのだろうとも思います。

「お、おまんこじゅんじゅん♡って、あんっ♡ お、お汁が溢れてま
すっ♡ あッ♡ んっ、乳首ピンピン♡される、とッ♡ おまんこ
きゅん♡ってっ♡ なっっちゃうます……っ♡」

「さすがお嬢様です。本当に貴女は、幼い時分から優秀なお方でした」

そう言うのと、桂木は乳首を弾くのをやめて両方ともをぎゅむっ♡♡と強く摘みました。

折檻もされたことのない私は、その痛みに腰をググツと反らします。おまんこも一緒に絞られていき、息が一層浅くなりました。

「あんうッ♡♡ い、痛いっ♡ 桂木ッ♡」

「痛いと言う割には嬉しそうな声ですよ、お嬢様。気持ちがいいのならそう表現するべきです」

「い、痛いけど気持ちイイのっ♡ ひ、うっ♡ ああッ♡ ぎっ、ギリギリしないでえッ♡♡」

桂木は、腰を浮かしながら快感に喘いでいるのを目を細めて見下ろしました。

「媚薬の効能もあるでしょうが……」

痛いと言っているのに、桂木の指はまた一段と圧を増してギリギリ♡ギリギリ♡と私の乳首を無惨に押し潰して絞ります。

桂木はニコツと笑っていました。

「お嬢様は、マゾヒストの気がありますね」

「ち、ちがッ♡ んうっ♡♡」

「乳首をギリギリと痛くされて、嬉しそうに感じてるじゃないですか。自覚はなくとも、お嬢様は立派なマゾヒストですよ」

「そんなこと……ッあ♡ はあっ♡ んあッ……♡」

「こう見えて私はサディストなので、嗅覚はあるつもりです」

嗅覚とは、マゾヒストに対しての嗅覚なのでしょう。理解はできませんが、桂木の言う『こう見えて』には反論をしたくなりました。いつだって私を子どものようにからかう彼を、どうしてサディストでは

ないと言ひ切れるでしょうか。

「全然、こう見えてじゃな……っ♡」

「何か？」

ぐりいッ♡♡

私の反論にもにこやかな桂木は、摘んだ両方の乳首を強く捻り上げました。乳房も引っ張られて、だらしなく歪んだ形に羞恥心と快感が募ります。

「あんッ♡♡ 乳首引っ張らないでえっ♡♡」

「これはお勉強なんですよ、お嬢様。いつもの我儘を全て聞いてもらえとは思わないでください」

笑顔でありながらも桂木の口調は指導者然としていました。教育の場においては、主人である私の意向などは時に無視されるものです。

桂木はくねくねと揺れる私の膝を掴むと、少しも迷わずに開帳させ

ました。誰にも見せたことがない箇所を開けっ広げにされ、しかもそこは誤魔化せないほど濡れているのです。思わず手で隠したくなりましたが、指導を受ける側の人間として必死に耐え、口元に手を置きました。

「や……っ♡ 恥ずか、しい……っ♡」

「ええ、ここでは恥じらうのは正解です。しかしながら、恥じらうことがバカらしくなるほど、お嬢様のおまんこはぐちよぐちよに濡れておりますね」

「い、言わないでっ……♡」

「これもプレイの一環ですよ。お嬢様は、辱められる方が好みかと」

マゾヒスト前提で話をされて言い返そうとした瞬間、桂木が開帳した私に股に顔を落としていきました。驚いて止めようとしたが、

間に合うわけがありません。

「綺麗なピンク色です。丁寧に使わせていただきますね」

「え、あっ♡ ひッ……♡♡」

ちろっ♡♡

おまんこの上にある小さな突起を、舌で小さく舐められました。ちろ……ッ♡ちろ……ッ♡とささやかな動きを繰り返しながら、桂木が私に問いかけます。

「こちらの名前はご存知ですか？」

舐められるたびに電流が走ったように快感が暴れ、顎が上がったまま声が抑えられません。それでもなんとか答えを紡ぎました。

「あっ……♡ あッ♡ く、クリトリスっ♡ あんっ♡♡」

「正解です。クリトリスも性感帯であり、乳首以上に刺激を感じやすい箇所であると思います。舌で優しく舐められるだけで、腰が跳ね上

がるでしょう?」

「ひう……ッ♡ あつ、あ♡」

「お嬢様、少し堪えてください。抑えさせていただきますね」

「あぁっ♡♡」

桂木は私の太ももをしつかりと掴み、勝手に跳ねてしまうおまんこを抑えつけました。

太ももの肉に、桂木の手のひらが沈んでいます。いつも私の傍に立っている人間とは別人に思えるほどの力強さでした。

(あ、逃げられないっ♡ 桂木におまんこ固定されて、桂木の口がぴったり私のクリトリスに添えられて……っ♡ 気持ちイイのから逃げられないようにされちゃってるっ♡)

実際、快感を多少なりとも逃していたのは勝手に動いていた腰だったのだとも思いました。ちろちろ♡ちろちろ♡と舌でクリトリスを遊

ばれても、腰が動かないせいで全ての快感が子宮に集まっていくのです。

「だ、だめっ♡ 桂木っ、あ♡ これっ……♡ ひん……ッ♡ き、気持ちいい、からあっ♡ んうっ♡」

「その『気持ちいい』を教わっている最中ですよ、お嬢様。しばしご辛抱を」

ぐりぐりぐりぐりっ♡

気持ちいいことから逃げようとする私を、桂木が叱ります。

硬くさせた舌先がクリトリスを押し潰し、捏ね、その快感もまた寸分も逃がすことができません。私は、はしたない声を大きくさせました。

「ああっ♡ だ、め……っ♡ だめっ♡ あっ♡ あッ、桂木っ♡ それだめなのっ♡♡」

「非常に良い反応です。少し強くいたしましたでしょうか」

「ひあっ♡♡」

宣言と同時に、桂木の舌は膨れたクリトリスをぐりぐりゆぐりゆぐり♡と容赦無く責め立てました。裏筋を重点的に舌で擦られて、でもやっぱり腰は動かせず、桂木の手のひらが私の太ももに痕を残しそうなほど力を込めてきます。

「やっ♡ そんなに強く、しちや……ッ♡ はあっ、んッ♡ だめっ

♡ ビリビリ♡ ってっ♡ おまんこがっ♡ ああっ♡」

「はあ……っ♡ 美味しゅうございますよ、お嬢様」

「だめっ、だめっ♡ 桂木っ♡ 私……っひう♡ なんか……っ、キ
ちやうっ♡ 変なの、キちやうっ♡ キちやう、のおっ♡ あッ♡
かつらぎいっ♡♡」

「ええ、いいんですよ。ん……絶頂は抵抗するものではありません、

どうかそのまま快感を受け取ってください」

ちゅうううううっ♡♡

クリトリスをあむ♡と口に咥えた桂木は、そのまま取れてしまうかと思うくらいの力で思い切り吸い上げました。子宮に集まっていた快感も吸われていくようです。お腹を突き破っていくように高まって、高まって、頂点が見えるようで、私は声を上げました。

「あ~~~~っ♡♡ だめっ♡♡ だめだめだめっ♡♡ かつらぎっ、やめ、てえっ♡♡ キちやうっ、きちやうっ♡♡ 何これっ♡♡ あ、あっ♡ だめっ♡♡ んうっ……~~~~っ♡♡♡」

頂点から落ちてしまうような、制御しようのない快感でした。

シートを掴んで、顎を上げ、恐怖に似た思いで目を瞑って飲み込みます。痙攣するように腰が浮きましたが、桂木の手ひらが快感を逃すことを許してくれません。ビクンっ♡ビクンっ♡という余韻で息を

荒くしていると、桂木が落ち着いた声で言いました。

「今のが『絶頂』あるいは『イク』ということです。お上手でしたよ、お嬢様」

力の入らない目で桂木を見れば、彼はいつもの温和そうな目で私を見下ろしていました。

「また、男性が女性器を舐めることを『クンニ』と言います」

授業さながらの声を聞きながら解放された膝を閉じると、桂木は「ですが」と付け加えてそれを静止させました。再び大腿を開かせ、驚く私に桂木は言います。

「今のは序の口です」

「えっ」

十分に快感を与えられたはずなのに、序の口とは何の話でしょうか。

桂木はさつきと同じように私の太ももをがっしり固定すると、さつきと同じように顔を埋めました。

「こうやって、ナカに舌を入れるとより女性は快感を感じます」
にゆるんっ♡という感触と共に、おまんこのナカに桂木の舌が入ってきます。その舌は、間髪入れずにナカの肉をちゅこちゅこ♡ちゅこちゅこ♡とくすぐつていやらしい水音を奏でました。

「あっ♡ それだめッ♡ あっ、あッ……♡ だ、めえっ♡ ひうっ♡」

「んん……っ、愛液がしとどに溢れて大変いやらしいですね、お嬢様。お気に召していただけたようで何よりです」

ぢゅるるるるるッ♡♡

もう、何をされているのかすら分かりません。でもとにかく、先ほどクリトリスを吸い上げられたのと似たような感覚で腰が浮き上がり

ました。舌が動くたびに愛液と絡み、官能的な音が止まりません。

「ああっ♡ 吸っちゃだめっ♡ あ♡ ん、あっ♡ 桂木っ♡」

「可愛い反応で素晴らしいですよ、お嬢様。たくさん虐めて差し上げたい気持ちになります」

虐めるといふ表現は、恐らく正しいのだと思います。桂木の舌と唇は、私のおまんこにかぶりつきながらぢゅぱっ♡ぢゅぱっ♡とリズムを生んだり、ぢゅううううッ♡と引っ張ったり、ぢゅぞぞぞッ♡♡と振動させてこの上なく下品な音を響かせました。

虐められたクリトリスとおまんこに、私の子宮は先ほどの絶頂を思い出していました。

「あ、あっ♡ だめッ♡ かつらぎっ♡ だめ、そんなにいっぱい吸われちゃったらっ、あッ♡ また、イっちゃ……うんっ♡ あっ♡ あっ♡」

「今度はイくと氣にきちんと言葉にいたしましょう。いやらしければいやらしいほど、男は興奮するものです」

興奮すると言われても、私の知っている言葉なんてそう多くありません。クリトリスをぢゅるるる♡と吸い上げる桂木に腰を反らせながら、私は声を上げました。

「ああっ、だめだめだめ♡　イクイクイクイツちゃうつ♡　おまんこぢゅうぢゅう♡されてイツちやいます♡　イツちゃうつ♡♡　あ、あ、イツちやうう………♡♡　ッあ、あっ………♡♡　♡♡♡♡」

ビクビク♡と大きく絶頂してまた腰を跳ねさせると、桂木は私のクリトリスにちゅ♡♡とキスを落としました。そのせいでまた腰がぴくん♡♡と揺れます。

「褒めるところしかありませんね。大変素晴らしい」

くちっ♡ くちっ♡

濡れそぼったおまんこの割れ目を、桂木の太い指がゆっくりと往復しました。指なんて硬いと思ったことがないというのに、今の私には「硬くて気持ちいいもの」です。桂木の指はクリトリスを押し付けたくなるような無骨さがありました。

「んっ……♡ ああ……ッん♡」

「初日はクンニで終わってしまう方も多いのですが、お嬢様は覚えが早いですから」

「あっ♡」

にちにち♡ にちにち♡

真っ直ぐだった指が曲げられ、その先っぽがおまんこの入り口をくすぐります。

愛液がぴちやぴちや♡と鳴っています。きつとこれは桂木の意地

悪です。「貴女様の音ですよ」と言われているような、そんないやらしさがありました。

「入れてみましょうか」

「う、あッ♡」

にゅぷ……っ♡

「何を入れるか」などは言わずとも分かりましたし、桂木も改めて確認はしませんでした。

私のおまんこは、桂木の指をすなりと受け入れていきます。自分以外のものがナカに入ってくる感覚はな何とも言いようがありません。なんだか、悪いモノを受け入れているような薄い背徳感がありました。

「あ……ああ……っ♡ は、ん……ッ♡」

「ゆっくり入れていきます。痛みがあればすぐに仰ってください」

ぬう~~~~~♡

ゆっくりゆっくり入ってくる指に、少し息が詰まりました。

桂木の指は、とても太いです。

幼い頃、私は庭師たちの指を見て「桂木の指だ」とよく思っていました。私はそれを「お父様やお祖父様は細いの。『竹内家』だから？」と心底不思議に思っていました。幼い頃の私にとっての『常識』は、『竹内家の常識』と同義だったのです。もちろん大人になった今では、それが生まれ持った体格によると理解しています。

そして、その太さが快感に繋がっているのもよく理解ができました。

（圧迫感はあるけど、入ってくるだけで気持ちいい……っ♡ ナカのお肉にちゃんと引っかかってるっ……♡ ぞわぞわ♡ぞわぞわ♡っ
て……ッ♡♡）

「弾力があって、柔らかい膣壁です。男性を悦ばせる器だとこれだけで断言ができますよ」

「あ、んっ♡」

ちろ♡ ちろ♡ ちゅぱッ♡ ちゅぱッ♡

桂木に乳首を舐められて、その快感で大きな声で喘いでしまいました。痛みから気を逸せるようにと、桂木の優しさから来るものなのでしょう。

「もう少しですよ」

「ん……ッ♡ あ、っ♡」

自分の臓器がこんなに奥まで繋がっているなんて思ってもいませんでしたし、桂木の指は太いだけでなく長くもあるのだと初めて知りました。

牛歩と言えるほどのスピードに、少し焦れったく思います。桂木の

指が奥へと進むたびに私のおまんこはきゅうッ♡きゅうッ♡と小さくなっていました。

（もつと奥……っ♡ 奥に……ッ♡♡）

焦れたい指を追いかけていたその時、ついに桂木の指は最奥をコッスン♡♡とノックしました。確かめるように、一度だけ奥の壁をかりっ♡と引っ搔かれます。

「あッ♡♡」

「奥まで到達しましたね」

私のおまんこは桂木の指にきゅうきゅう♡としがみついています。でも止められようもなく、桂木に乳首をちゅうッ♡と吸い付かれるともつと締まってしまいます。桂木の吸い付きで、乳首は細く形を変えました。

「痛みはありませんか？」

「んッ♡ た、ぶん……っあ♡」

「さすがお嬢様です。少しずつ動かしますよ」

ぬりゅう……ッ♡ ぬりゅう……ッ♡

ピンと伸ばされた中指が、ゆっくり私のナカを往復していきました。牛歩に比べると少しだけ速くなり、快感は倍になっています。腰が勝手に揺れて、出入りしていく桂木の指ばかり見つめてしまいました。

「あ……っ♡ んんうっ……♡ あ、ふあっ……ッん♡」

「お嬢様の圧で、指が押し返されてしまいますね。このナカに挿入できると思うと、不躰ながら役得でしかありません」

桂木が言いながら乱れていた髪の毛をかきあげました。珍しく彼の男の部分を見た気がして、子宮が一段と小さくなつてしまいます。

それに気付いた彼は、口の端を上げて笑います。

「どうかされましたか？」

「な、んでもな……っん♡」

「左様でございますか。それは失礼いたしました」

慇懃無礼な物言いは、私を揶揄っている証拠です。でも私は相手をしてられませんでした。桂木の太くて長い指は、尚もぬちゅぬちゅ♡
ぬちゅぬちゅ♡とおまんこのナカを往復し続けているのです。

「お嬢様がはしたないお汁をたくさん出してくださるおかげで、動きやすくなつてまいりました。少し速くしましょう」

ぬちゅ♡ ぬちゅ♡ ぬちゅ♡ ぬちゅ♡

愛液の滑りと、少し溶けた緊張のおかげでしょう。桂木の指は容易くスピードを上げました。そのスピードに引っ張られるように、甘ったるい声が止められなくなつてしまします。

「あん♡♡ あ♡♡ んんっ、あ♡♡」

真っ直ぐに伸ばされた中指が、出たり入ったりを何度も何度も繰り返します。

高まる快感を集めながら、私は「奥をもっと触って欲しい」と思いました。奥が切なくしびれているのです。まだ教わっていないのに、おまんこの奥が性感帯であることを私の身体はなぜか知っていました。

桂木は「セックスは共同作業」と言っていました。であるのならば、私はその教えをきちんと守らなければなりません。

「か、桂木っ、んっ♡ あっ♡♡」

「はい、なんでしよう」

「お、奥を……っ♡」

「はい」

私のおまんこをぐちゅぐちゅ♡ぐちゅぐちゅ♡と鳴らしながら、桂

木はにつこりと笑いました。優しさなどではありません。彼は今この瞬間においても指導者なのです。

（おねだりしなきゃ……っ♡ おまんこいっぱいシてっていやらしくおねだりしないと桂木は♡ 私のすぐ虐めるから♡♡）

「おまんこの奥っ♡ いっぱいシてくださいっ♡ ん、あっ♡ 奥がジンジン♡って切ないのっ、ッあ♡ 桂木の太い指でっ、いっぱいごしごし♡ってシてっ♡ おねがいっ♡ んっ♡ かっらぎっ♡♡」

羞恥心を捨てて言うのと、桂木は「愛らしいおねだりです」と評価をくれました。

押揶われたような気はしましたが、奥まで指をぐうっ♡と入れられ、そんなこともどうでも良くなります。

「仰せのままに、お嬢様」

こちゅこちゅこちゅこちゅ♡♡

結局、桂木はいつだって私に甘いのです。

中指を奥へ奥へと押し込み、突き当たった箇所を桂木が遠慮なしに擦ります。腰が勝手に浮き上がり、絶頂の準備を始めました。

「あっそこっ♡ そうっ♡ じくじく♡ って切なくて、奥シてほしかったのっ♡ あ、ツん♡ いいっ♡ 桂木の指気持ちイイっ♡ しゅきいっ♡♡」

「まだ教えていない性感帯を、本能的に分かっておられる。優秀すぎるほど優秀です」

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡と奥を掻き鳴らされ、私の腰はどんどん上がっていききました。桂木は私の性感帯を、力加減含め寸分変わらず理解しきっているようです。

「あッ、あッ♡ そこ虐めちゃっ♡ だめ、だめっ♡ イっちゃうっ♡ そこイっちゃうッ♡♡ あっ、だめえっ♡♡」

「カクカクと下品な腰の動きも素晴らしいです、お嬢様」

「だ、だって勝手にいッ♡ あっ……ひうッ♡ カクカク♡しちゃうのおっ♡♡」

「せっかくなので、下品な言葉で絶頂する練習もいたしましょう。いくことをアクメとも言います。次に絶頂する際は、『アクメする』と可愛らしい声で下品に宣言してください」

逆らえる余地などありません。桂木の指は、私のおまんこを着実に絶頂へと導いていきます。

私が望んだ通りの速さと圧で。まるで、私自身が動かしているような滑らかさで。

「あ、くるっ♡ くるッ♡ アクメきますっ、んッ♡ 人妻になるのにつ♡ 執事におねだりして腰カクカク♡しながらっ♡♡ アクメしちゃいますっ♡♡ あッ♡♡ あッ♡♡ イッ、ぐ……んッ……」

♡♡♡ …… ツ ツ ツ ♡♡♡」

腰を大きく反らし、その格好のままビクビク♡と絶頂に襲われました。着地ができたような気持ちで「はあ……♡」と熱い吐息を落とすと、桂木は言います。

それはもう、けろりと言い放つのです。

「お上手です。では、もう一度頑張りましょう」

「えっ……!? あ、あん♡♡♡」

私のおまんこはまだ痙攣していました。だというのに、桂木の指はその痙攣を途切れさせまいとするかのようにぐぢぐぢ♡ぐぢぐぢ♡と激しい動きを続けます。

「ああ♡♡ だめ♡♡ それだめ♡♡ まだイってるっ、お♡♡♡」

「快感に慣れることもお勉強です。二、三回連続でイってみましょう。お嬢様はドMな上に淫乱なようですから、不安に思われることは

ありませんよ」

「あ~~~~ッ♡♡♡ まってっ♡♡♡ まってまってまってえっ♡♡♡ かつらぎいっ♡♡♡」

「ほら、締まってまいりましたね。腰も浮き上がってヘコヘコと下品な動きです。普段なら注意をしたくなりますが、今夜は褒めさせてください。淫乱そのもので大変よろしいかと」

「やだやだやだっ♡♡♡ またクるッ♡♡♡ アクメくるうッ♡♡♡ キちやううっ♡♡♡ あ、あつ、あ~~~~ッ……~~~~ッッッ、ッ♡♡♡」

本当に普段なら、こんなに下品な格好できません。したいとも思いませんし、何なら辱めに等しいです。

なのに私は、桂木におまんこをくすぐられながら腰をヘコヘコ♡揺らしながら再び絶頂していました。

そうして、また次の絶頂の準備をされます。

「表情すら完璧です。初日でここまでのお顔できるなんて、やはりお嬢様には素質がありますよ。淫乱の素質です」

「おあっ♡　だめえッ♡♡　奥しちやらめえっ♡♡　こちゅこちゅ♡しちやらめなのおっ♡♡」

「シてほしいと言ったりダメだと言ったり、お嬢様は相変わらず我儘が尽きませんね。もちろん桂木にとっては可愛くて仕方ありませんが、嫁ぎ先では少し控えるようお願いいたしますよ。竹内家の品位に関わりますので。ああ、また締まってまいりましたね。どうぞイってください」

「だめだめだめイくうッ♡　イくイくイくイく……ッ♡♡　ひ、うッ……お……ッッ♡♡　ん、う……ッッ♡♡♡♡」

桂木のお小言も聞いていられませんでした。絶頂の余韻を増長させるような愛撫に達すると、また桂木の指が動き出します。思わず大き

な声を出してしまいました。

「だ、めえッ♡ か、桂木っ♡♡」

「これ以上やったら嫌われてしまいますね。お嬢様に嫌われしまうと、桂木は困って泣いてしまいます」

明らかに嘘を言う桂木は、目を細めて笑いました。私に甘い、いつもの桂木の顔です。

そう思ったのに、次の言葉で私はひゅつと心臓を落としてしまいます。いつもの顔、いつもの声で彼は「では」と言いました。

「最後に。大きなアクメをして終わりますよう」

「や……っ♡ な、のにいッ♡ ツあ♡♡」

「お嬢様、快楽は怖いものではないのです。どうぞ我慢なさらないように」

「やらあッ♡ もうだめなのおッ♡♡」

「頑張りましょう、お嬢様ならできますよ。下品なガニ股で腰をへこへこさせながら、上手なアクメを桂木に見せてください」

「ひ、おツツ♡♡」

私に甘い桂木は、大事なものを扱うような仕草でクリトリスを口に含んでぢゅううううう♡と吸い上げました。

同時におまんこの奥をカリカリカリ♡♡と引っ掻かれ、膣内がどんどん小さくなります。膀胱を絞られているような感覚に、悲鳴のような声を出してしまいました。

「おゝゝゝツツ♡♡　だめだめだめキちゃうツ♡　なにかキちゃうつ、桂木っ♡♡　だめっ♡♡　あッ、かつらぎいっ♡♡」

そう懇願しても、桂木はやめてくれません。奥をカリカリ♡しながら、今度はクリトリスに甘く噛みつきます。その強い快感で、私の力の何かが決壊しました。

「ひっ……あ……ッ♡♡♡ イ……ッ♡♡♡ ぐうッ……くくッッッ
♡♡♡」

ぷしゅうッ♡ ぷしゅッ♡♡

絶頂と同時におまんこから飛び出た液体で、シートがぱたぱたと音を立てました。

ああ、なんということでしょうか。成人したというのに。

「や……ッ……♡」

お漏らしをしてしまった自分に、大変絶望しました。

ところが桂木は至極穏やかです。私の頬にキスをしながら「大丈夫ですよ」と優しく言います。

「これは潮と言って、お漏らしではありません」

乱れた私の髪の毛を優しく撫でる桂木は、ひと束を掬い上げました。意地悪そうな微笑みで、忠誠を誓うようなキスをします。

「仮にお漏らしをしたとしても、一向に構いません。お嬢様のお漏らしなど、桂木はもう見慣れておりますので」

「~~~~！」

この執事は、一体いつまで私を子ども扱いするつもりなのでしょうか。

行儀の悪いことだと承知していながら、私は桂木に向かって枕を投げつけました。

「紛うことなき事実ですございますよ」

桂木はヘラヘラと笑うばかりです。結局私は、彼にとってまだまだ子どもであるということなのでしょう。枕を投げつけるなど、およそ淑女のすることではありません。

当然のようにベッドメイクを始めた桂木は、終わるや否やこう言いました。

「これから毎日『お勉強』をいたします。つきましては予習もきちん
とされますように」

「予習……？」

「はい。オナニーです」

「！」

「もちろん、そちらの指導もきちんいたしますよ。本日は疲れてお
いででしょうから、どうぞゆつくりおやすみになってください」

桂木は私の手を取ると、いつものように甲に小さくキスを落としま
した。幼少期から続くルーティンです。なのに、髪の毛にキスをされ
るよりも何故かドキドキしてしまいました。

「おやすみなさいませ、お嬢様」

桂木の所作はいつもと全く同じです。腹が立つほど、桂木は最後ま
で桂木でした。

サークル名：オンリーユー
著者：水瓶